

論文

# 外国資料からみた『おもろさうし』の「広母音化」

その口承性と類推的仮名遣いについて<sup>(1)</sup>

石 崎 博 志

〔抄 録〕

『おもろさうし』は嘉靖10年(1531年)から天啓3年(1623年)にかけて首里王府によって編纂された歌謡集である。従来、言語資料としてこの歌謡集を分析した結果、イ段やウ段に由来する語がかえってエ段やオ段で表記される現象(「広母音化」)が観られることが指摘されてきた。本稿は、『おもろさうし』と同時代、あるいは相前後する時代の琉球語を示した朝鮮語資料や中国資料に、この「広母音化」の現象が観られるかを考察したものである。その結果、『おもろさうし』において「広母音化」が認められる語は、同じ語を示す外国資料においてはその現象が観られないことを指摘した。そして、『おもろさうし』において「広母音化」しているようにみえる現象は、類推的仮名遣いの反映であると結論づけた。

キーワード 琉球語、『おもろさうし』、広母音化、類推的仮名遣い、漢語資料

## 1. はじめに

『おもろさうし』の文体は、これまで実際に詠唱されていた音をそのまま写し取ったという説<sup>(2)</sup>と、ある種の規範を意識した類推的仮名遣いが反映する<sup>(3)</sup>という、大きく分けて2つの説がある。沖縄の言葉、とりわけ首里の言葉は1501年から20世紀に至るまでの間に段階的に5母音から3母音に狭母音化する趨勢をもつが<sup>(4)</sup>、『おもろさうし』はその趨勢に反し、ウ段音がオ段音に([u] > [o])、イ段音がエ段音に([i] > [e])に対応する例が数多く観られる<sup>(5)</sup>。かりにウ段音からオ段音、イ段音からエ段音への変化をここで「広母音化」と呼ぶなら、こうした例は『おもろさうし』において少なからず観察され<sup>(6)</sup>、その解釈をめぐって議論が積み重ねられてきた。

しかし、それらの議論はいずれも『おもろさうし』のみを分析対象として立論されたものである。かりに琉球語の歴史において「広母音化」が一般的な現象であるなら、『おもろさうし』

以外の資料においてもその現象が確認されるはずである。だが、同時代の資料や相前後する時代の資料に「広母音化」の現象が観られるか否かを論じたものは管見の限りみかけない。

本稿では、琉球語を記した他の言語資料、とりわけ外国語で琉球語を記した資料において、『おもろさうし』で「広母音化」と認められる語彙がどのように記述され、それがどのような振る舞いをしているのかを考察する。外国資料は記述した話者の言語によって記述が左右される可能性もあるが、その一方で母語話者による記述にまみられる書き言葉の規範からの影響を受けにくいというメリットがある。本稿での考察を通じて、『おもろさうし』の文体が口承をそのまま反映したのか、それとも類推的仮名遣いからなるのかという議論に一石を投じたい。

## 2. 資料と方法

用例の分析に入る前に、本稿での考察方法を説明する。まず『おもろさうし』において「広母音化」していると考えられる用例を挙げ、朝鮮資料や中国資料においてその語に相当する項目がどのように記述されているかを確認する。そののち、それらの語に「広母音化」が『おもろさうし』と同様に観られるかを見極める。

確認方法としては、『おもろさうし』で「広母音化」していると言われる語に対応するハングルや音訳漢字を特定し、そのハングルや音訳漢字が「広母音化」を示しているのか確認する。主要な考察はここまでであるが、念のためそのハングルや音訳漢字が使われている他の語彙における用例も確認し、それらが示す語の発音が「広母音化」しているかも確認する。本稿で用いる外国資料は以下である。

- (1) 申叔舟『海東諸国紀』所収、成希顔筆録「語音翻訳」1501年(以下『語音翻訳』と略称)
- (2) 陳侃『使琉球録』「夷語附」1534年(以下『陳侃』と略称)
- (3) 蕭崇業『使琉球録』「夷語附」1579年(以下『蕭崇業』と略称)
- (4) 夏子陽『使琉球録』「夷語附」1606年(以下『夏子陽』と略称)
- (5) 徐葆光『中山伝信録』「琉球語」1721年(1721年二友齋藏板。以下『伝信録』と略称)
- (6) 潘相『琉球入学見聞録』「土音」1764年(以下『見聞録』と略称)

上記のうち(1)『語音翻訳』は表音文字であるハングルを使用している。『語音翻訳』で用いられるハングルには、ウ段音に対応する [u] と、オ段音に対応する [o] がともに使用されているので、当該資料はウ段音とオ段音を区別し、書き分けることが可能な資料であると言える。つまり漢字と異なり、文字としての表音能力に問題がない。そのため『語音翻訳』は『おもろさうし』よりやや時代が先んじるが、参考とすべき資料であると考えられる。そして(2)～(6)の漢語資料<sup>(7)</sup>は全てが等価ではなく、『おもろさうし』と時代的に重複するのは『陳侃』、『蕭

崇業』、『夏子陽』である。よってこの3書に分析の重点が置かれることになる。『おもろさうし』 編纂以降に改訂が加えられているとおぼしき『伝信録』と『見聞録』は本稿においては参考程度にとどめる。

なお『おもろさうし』は、首里王府が1531年(第1巻41首)、1613年(第2巻64首)、1623年(第3巻～第22巻1449首)の3回にわたって収集した歌謡を取める。そして写本により表記が若干異なるため、各写本の校合が行き届いている『定本おもろさうし』<sup>(8)</sup>(以下「定本」)を用い、適宜どの写本による記述であるかを示す。

次章より用例の具体的な分析にはいるが、3. 1でイ段音に由来する発音が『おもろさうし』においてエ段音で表記されている例をとりあげて考察する。そののち3. 2で『おもろさうし』においてウ段音に由来する発音がオ段音で記されている用例の、朝鮮語資料や漢語資料における振る舞いをみる。分析においては『おもろさうし』の用例を挙げ、そのあと外国資料における記述を確認する。そして両者を比較することで、外国資料で「広母音化」の現象が観られるかをみていきたい。

『おもろさうし』の掲載箇所は「定本」の巻別番号と通し番号を用い、特に明記しない場合には「定本」の表記を採用する。例えば、以下のように示す。

「あやつちへに せ はやせ」第2巻36(77)

上記の「あやつちへに せ はやせ」は「定本」の記述、下線は筆者が施した分析の対象となる音を示している。括弧「」外の「第2巻36(77)」の「第2巻」の後ろの「36」は巻内の通し番号であり、「(77)」は「定本」で付されている通し番号を示す。他のテキストを引用する場合は、「尚家本」、「田島本」、「仲吉本」、「伊本」、「校本」、「からの舎本」などと注記する。

なお漢語資料は中国語(提示語)に対し、その意味に相当する琉球語の発音を漢字で表している。この琉球語の発音を示す漢字を「音訳漢字」とよぶが、本稿では提示語と音訳漢字の対応を以下のように示す。

“提示語(意味)：音訳漢字”

例えば、本稿において“獅子(しし)：失失”のように書かれていれば“獅子”が中国語の提示語を表し、( )内の「しし」は提示語の意味を平仮名で表したものとなる。

### 3. 用例の分析

#### 3. 1 『おもろさうし』でイ段音がエ段音で表記されている例

本節では『おもろさうし』においてイ段音がエ段音で表記されている例をとりあげる。そののち、朝鮮資料や漢語資料で当該語彙がどのように記述され、その音を示す音訳漢字が、他

のどのような語に用いられているのかを確認し、「広母音化」の有無を見極める。

### 3. 1. 1 獅子(せせ)

『おもろさうし』第2巻には以下の例があり、「せせ」は『おもろ辞典』では「獅子」と解釈されている。

**【せせ】**

「一ごゑくこてるわにあやつちへにせゝ はやせ」第2巻36(77)

では『語音翻訳』では「獅子」に相当する語はどのように書かれているだろうか。

表1 「獅」に対するハングル注音

	語音翻訳	発音
獅(しし)	시시	[ci:ci]

このように、獅子に相当する“獅”に対しては、「しし」となっており、「広母音化」はしていない。

さらに、漢語資料ではどうなっているだろうか。漢語資料における「しし」は“獅”あるいは“獅子”の提示語を使っており、表2にみるようにこれらに対する音訳漢字は“失”、“施”が使われている。

表2 「獅」を含む提示語に対する音訳漢字

	陳侃	夏子陽、蕭崇業	伝信録
獅(しし)	失失	失失	施失
獅子(しし)	失失	失失	

以上のように『おもろさうし』と同時代の『陳侃』、『夏子陽』、『蕭崇業』では“失”が、『おもろさうし』よりやや時代が下る『伝信録』は“施”と“失”が使われている。これらはいずれも中古音で止摂に属し、母音は概ね [i] に相当する。よって「せせ」という発音を示す用例ではない。

ではこれらの“失”が上記の漢語資料における他の用例では、どのような発音に対して使われているのだろうか。以下は『陳侃』のみの用例であるが、いずれも音訳漢字の“失”が使われる例はサ行イ段音「し」に対応するもので、「せ」に対して“失”が用いられている例は一例もない。

【し】

霜(しも)：失母  
 長(ながし)：拿嗑失  
 後(うしろ)：吾失禄  
 西(にし)：尼失  
 年(とし)：多失  
 十一月(しもつき)：失木都及  
 十二月(しわす)：失哇思  
 牛(うし)：吾失  
 舵(かじ)：看失  
 肉(しし)：失失  
 脚(あし)：惡失

【せ】

用例なし

『陳侃』以外の、その他の資料においてもやはり“失”がサ行エ段音に使われている例はない。なお“施”についてはこの『伝信録』の用例のみで、この用例においても、サ行イ段音がサ行エ段音に記される「広母音化」する現象は観られない。

ちなみに『語音翻訳』で“시”が使われる他の用例も観てみよう。表3の例においても、いずれも“시”はサ行イ段音に対応しており、「広母音化」の用例は観られない。

表3 「肉」、「今年」、「牛」に対するハングル注音

	語音翻訳	発音
肉(しし)	시시	[ɕiɕi]
今年(ことし)	구두시	[kutuɕi]
牛(うし)	우시	[uɕi]

3. 1. 2. 日(ひ・へ)

「日」の発音は、ハ行イ段音「ひ」に由来する。しかし『おもしろさうし』では「日」に対して二つの表記がある。一つは第6巻における「ひ」であり、もう一つは第14巻における「へ」で、後者は「広母音化」を示す例である。

【ひ】

「けおのよかるひに」第6巻46(336)

【へ】

「たけかなしあやへかさ」第14巻8(989)

【ひ】の「よかるひに」は「良かる日に」となり、「ひ」も同様に「日」に相当する。【へ】の「あやへかさ」は「綾日傘」で、「へ」はやはり「日」に相当する。よって両者は同じ語を示している。

中国資料においては、“日”という提示語に対し「昼(ひる)」の意味を当てており、「陽光」を表す意味での音訳漢字は当てられていない。よって『おもろさうし』より時代が下る『見聞録』を参考までに提示すると、以下のように提示語の「日」に対して音訳漢字“虚”があてられる。

表4 「ひ」に対する音訳漢字

	見聞録
日(ひ)	虚

そして『見聞録』における音訳漢字“虚”は全てハ行イ段音「ひ」に対応する。以下がその用例である。

【ひ】

人(ひと)：虚毒

鬚(ひげ)：虚及

脚(ひざ)：虚煞

額(ひたい)：虚渣衣

晝(ひる)：虚魯

左(ひだり)：虚答歴

音訳漢字“虚”が「へ」を示すとすれば、上記の“人”～“左”の語が全て「へ」と読まれ、人(へと)、鬚(へげ)、脚(へざ)、額(へたい)、晝(へる)、左(へだり)と読むことになる。他の資料でもこれらの語に広母音化は観られないため、やはり“虚”はイ段音の「ひ」を示しているものとするのが妥当である。

また、上記の“脚(ひざ)”、“晝(ひる)”に相当する言葉が『語音翻訳』に入っているが、それらがどのような発音で記されているのだろうか観てみよう。

表5 「ひざ」、「ひる」に対するハングル注音

	語音翻訳	発音
足(ひざ)	비샤	[piɕja]
白日(ひる)	피루	[pʰiru]

上記の表にあるように、いずれも [i] を示すハングルが使われており、イ段音を示している。つまり、資料の古い方から並べると、『語音翻訳』は「ひ」のみ、『おもろさうし』は「ひ」と「へ」、『見聞録』は「ひ」のみとなる。よって通時的に資料の振る舞いをみた場合、『おもろさうし』の「へ」という「広母音化」の例は、些か例外的表記であると言えよう。

### 3. 1. 3 知らず(せらす)、知り(せり)

『おもろさうし』には、以下のように第11巻と第21巻において、同じ文言で「せらす」(広母音化例)と「しらす」の用例が観られる。

#### 【しらす】

「又、むつきは せむるは しらす」第11巻26(586)

「又、むつきは せるむは しらす」第21巻113(1506)

#### 【せらす】

「又、さしふは おもろはせらす」第11巻26(586)

「又、さしふは、おもろは、せらす」第21巻113(1506)

この用例に対し、仲原・外間(1978：事典索引163)は以下のように記している。

「せら・す(宣らす) [他動] 奏す。申す。「しらす」に同じ」(仲原・外間(1978：事典索引163))

「しら・す(宣らす) [他動] 奏す。申す。「せらす」に同じ。動詞「しらす(宣らす)」の終止形。」

かりにこの「せらす」と「しらす」が同じ語を示している場合、これらの用例のみをみると「せらす」は「広母音化」した例と見なされる可能性がある。

漢語資料には「宣らす」という語がないので、ここではひとまず「知らず」とみなして考える。漢語資料においては、「知る」(知道)ないし「知る」の否定(不知道)においては、どのように記されているだろうか。

表6 「知」を含む提示語に対する音訳漢字

	陳侃	夏子陽、蕭崇業、伝信録
知道(しる)	失知	識之
不知道(しらず)	失監 <sup>(9)</sup> 子	失藍子

以上のように『陳侃』、『琉訳』では“失”が、『夏子陽』、『蕭崇業』、『伝信録』は肯定形では“識”が、否定形では“失”が使われている。これらはいずれも中古音で止摂に属し、母音は概ね [i] に相当する。これは“獅子”の項でも確認した通りである。

ではこれらの“失”や“識”が上記の漢語資料において、どのような単語に対して用いられているか。いずれも音訳漢字の“失”が使われる例はサ行イ段音「し」に対応するもので、「せ」に対して“失”が用いられている例は一例もない。

### 3. 1. 4 木(樹)(き・け)

「木」の単独での発音は「き」であるが、複合語の時には「木の葉」「木立」のようにオ段音の「こ」と発音することがある。しかし、『おもろさうし』には「木」を示す語に対する発音に、「き」のみならずエ段音の「け」という発音が現れる例がある。以下にその例を挙げる。

#### 【き】

「あやきとて くせきとて ゆすきとて とくか」第13巻92(837)

「かみにしやかふなやれ しちようきやてうみおうね」第13巻44(789)

#### 【け】

「しらけおゑて きよらけおゑてからは」第11巻80(635)

「しらけおゑて きよらけおゑて」第11巻80(635)

「よかるけはゑらて きやきやるけはゑらて」第13巻47(792)

「よかるけはゑらて きやきやるけはゑらて」第13巻47(792)

では、中国資料における「木」はどのような発音で示されているのだろうか。「木」を表す提示語には“木”と“樹”がある。提示語の“樹”に対しては、音訳漢字が“拿”や“那”を含み、“なき”の音を示しているが、この“拿”や“那”は衍字であると考えられる。よってこれを除くと「木」の発音としては“急”、“及”、“吉”が当てられることになる。

表7 「き」義に対する音訳漢字

	陳侃	夏子陽、蕭崇業	伝信録
樹(き)	急	急	急、吉
木(き)			鷄
杉木(すぎ)			思鷄

では『陳侃』において音訳漢字に“急”をもつ語がどのような単語の発音を示しているのかをみてみよう<sup>(10)</sup>。

【き】

甘蔗(をぎ<sup>(11)</sup>)：翁急

兔(うさぎ)：吾撒急

酒鍾(さかづき)：撒嗑子急

琉球人(おきなわひと)：倭急拿必周

【け】

竹(たけ)：達急

酒(さけ)：撒急

これらのうち、多くはカ行イ段音の「き」を表す例が多いものの、“竹”、“酒”など、カ行エ段音のものもある。音訳漢字“急”が「け」だったのか「き」だったのかはどちらとも解釈可能である。ただ、“急”を「け」と考えた時、甘蔗(をぎ)、兔(うさぎ)、酒鍾(さかづき)、琉球人(おきなわひと)の例が「け」であったとすることになる。これらは『おもろさうし』のみならず、他の資料でも「広母音化」している例ではないため、“急”を「け」と考えるのは些か無理がある。よって“急”が「け」ではなく、“き”であったと考え、“酒”、“竹”が当時においてすでにエ段音が狭母音化した例ととらえる方がより穏当な解釈であると考えられる。

『語音翻訳』には、“兔(うさぎ)”、“酒(さけ)”に相当する語が収録されているが、どのように注音されているのだろうか。

表8 「うさぎ」、「さけ」に対するハングル注音

	語音翻訳	発音
兔肉(うさぎしし=にく)	우상이시시	[usaŋicici]
酒(さけ)	사기	[sakwi]

上記にあるように、“兔”に対しては [i] を示すハングルで、“酒”に対してはエ段音を示

していると思われるハングルコ [kwi] が使われている。よって“兔”は「広母音化」してはおらず、“酒”に対しては、そもそもエ段音に由来しているため、「広母音化」を表している例とはいえない。

時代は下るが、“木”は『伝信録』に用例がある。「木」は単独の“木”に対して“鷄”の音訳漢字で示され、「杉」を表す“杉木”に対しても、音訳漢字“鷄”が使われている。「すぎ」に関しては「すご」、「すげ」などの発音はないため、“鷄”は「い」に対応すると思われる。このように『おもろさうし』で「木」を表す語が「き」や「け」で現れる例は、漢語資料では「き」のみで現れる。つまり、ハングル資料や漢語資料では「広母音化」は観られない。

### 3. 2. 『おもろさうし』でウ段音がオ段音で表記されている例

本節では、『おもろさうし』においてウ段段音がオ段音で表記されている例をとりあげる。そののち、朝鮮資料や漢語資料で当該語彙がどのように記述され、その音を示すハングルや音訳漢字が「広母音化」しているかを確認する。また、それらのハングルや音訳漢字が使われる用例についても確認する。

#### 3. 2. 1. 口(くち・こち)

『おもろさうし』の「口」に相当する表記は「くち」と、広母音化した「こち」の2種類の用例がある。例えば以下の2例は同じ文脈の同一表現であるが、表記が異なっている。

##### 【くち】

「あかくちやか よいつき」第1巻31(31)

「こかね、くち はりやさ」第13巻139(884)

##### 【こち】

「あかこちやか よいつき」第3巻108(108)

「てたか、こち よそいて」第12巻76(727)

では『おもろさうし』の「口」に相当する語は、『語音翻訳』ではどのように記しているかみてみよう。

表9 「くち」に対するハングル注音

	語音翻訳	発音
口(くち)	코치	[k <sup>h</sup> utçi]

「口」の「く」に対しては、非円唇後舌狭母音 [u] の記号が使われている。[u] の多く

は現代日本語のウ段音を表記することに使われており、どちらかと言えばより [u] の音価に近い。しかし、この例に関しては、オ段を示している可能性も全くないとは言えない。

漢語資料の表記がどのようなになっているかを以下に確認しよう。

表10 「くち」に対する音訳漢字

	陳侃	夏子陽、蕭崇業	伝信録	見聞録
口(くち)	谷之	窟之	濶生	窟止

『陳侃』は“谷”、『夏子陽』、『蕭崇業』、『見聞録』は“窟”が使われている。次に『陳侃』において“谷”が音訳漢字として使われている例をみよう。

### 【く】

- 六月(ろくがつ)：禄谷哇的
- 九月(くがつ)：谷哇的
- 草(くさ)：谷撒
- 熊(くま)：谷馬
- 鶴頂(とりのくち)：它立奴谷只
- 皇城(ぐすく)：谷俗谷
- 勅書(ちやくしょ)：着谷少
- 言語(くち)：谷只
- 靴(くつ)：谷足
- 口(くち)：谷之
- 鐵(くろがね)：谷禄嗑尼

### 【こ】

- 水(こおり)：谷亦里
- 米(こめ)：谷米
- 胡椒(こしょう)：谷燒

“谷”が「こ」に当てられる例が3例あるものの、その他の例はすべて「く」の発音であることを示している。仮にこの“谷”が「こ」を示しているとすれば、“六月”、“九月”、“草”、“熊”、“頂”、“皇城”、“勅書”、“言語”、“靴”、“口”、“鐵”、“陸”、“拾”で用いられていることになるが、『おもろさうし』のみならず他の資料においてもこれらの用例がいずれも「広母音化」している用例は管見の限り存在しない。よって音訳漢字の“谷”が「広母音化」を示す音訳漢字であると考えよりは、すでにこの時代に「水」、「米」、「胡椒」の「こ」が狭

母音化して「く」となっていたと考える方が自然である。

### 3. 2. 2. 国(くに・こに)

『おもろさうし』の第14巻に「国」(親国)に対して「こに」と「くに」の2つの表記がある。

#### 【くに】

「又 おやくにおわる」第14巻51(1032)

#### 【こに】

「又 ゑけりきやあんじおやこにおわとき」第14巻12(993)

“国”に対して「くに」と訓ずる例は『陳侃』、『蕭崇業』、『夏子陽』にはないため、時代が下る『伝信録』を参考として挙げると以下のように記述されている。

表11 「国王」に対する音訳漢字

	伝信録
国王(くにおう)	哭泥華

“国王”の音訳漢字である“哭泥”は「くに」のに相当するものと考えられる。「く」に相当するこの音訳漢字“哭”は、『伝信録』では他に“烏木(くろき)：哭羅鷄”、“臭(くさき)：哭煞煞”というカ行ウ段音にもっぱら使われており、カ行オ段音に対する用例はない。

やはり「国」の例においても漢語資料には「広母音化」を示す決定的な例ではない。

### 3. 2. 3. 冬(ふゆ・ふよ)

『おもろさうし』には「冬」にまつわる表現が比較的多く用いられている。その表記も第11、第15では「広母音化」した「ふよ」の表記が用いられ、第12巻には「ふゆ」と記されている。なお、第15巻18(1069)は、第12巻19(671)同じ文脈で用いられているが、表記が異なる<sup>(12)</sup>。

#### 【ふよ】

「ふよなつむしらす」第11巻88(643)

「ふよわ御さけもる」第11巻88(643)

「ふよは御さけもる」第15巻18(1069)

「なつ ふよむ わからす」第15巻41(1092)

「ふよ なつも わからす」第15巻41(1092)<sup>(13)</sup>

#### 【ふゆ】

「ふゆは御さけもる」第12巻19(671)

では、『語音翻訳』における「冬」に相当する語の表記をみてみよう。

表12 「ふゆ」に対するハングル注音

	語音翻訳	発音
冬(ふゆ)	平音	[p <sup>h</sup> uju]

以上のように、「冬」の「ゆ」に相当する母音にはウ段に相当する [ju] が当てられており、オ段に相当するハングルは使われていない。

一方、漢語資料はどうなっているだろうか。以下の表は提示語“冬”に対する音訳漢字を資料ごとに列挙したものである。

表13 「ふゆ」に対する音訳漢字

	陳侃	夏子陽	伝信録	見聞録
冬(ふゆ)	福由 <sup>(14)</sup>	福由	灰喲	弗欲

『陳侃』において、「ゆ」に相当する音訳漢字には“由”が用いられている。そして、“由”は、“冬”以外の用例においては「ゆ」と「よ」の双方に相当する用例に用いられている。

【ゆ】

雪(ゆき)：由其

下雪(ゆきふる)：由其福祿

弓(ゆみ)：由迷

眉(まゆ)：馬由

【よ】

肆(よっつ)：由子

夜(よる)：由祿

上記の挙例では、音訳漢字“由”は「ゆ」あるいは「よ」を示しており、「よ」を示している場合、「広母音化」の用例として解釈することになる。しかし、『語音翻訳』では以下のようになっている。

表14 「ゆき」、「ゆみ」、「よる」義に対するハングル注音

	語音翻訳	発音
下雪(ゆきふり)	유기푸리	[jukip <sup>h</sup> uri]
弓(ゆみ)	이우미	[iumi]
黑夜(よる)	이우루	[iuru]

“雪”、“弓”に対するハングルはウ段音を表しているのので「広母音化」しておらず、いずれも「ゆ」音を表しているものと考えられる。また“夜”についても“弓”の「ゆ」と同じハングルで書かれているため、“夜”は狭母音化していると考えられる。ちなみに提示語が“雪”、“下雪”や“冬”という沖縄の自然環境とは異なる要素を描いているが、この頃には沖縄でもすでに「雪」の語は入っていたと考えられる<sup>(15)</sup>。

では、『陳侃』よりも時代が下る『夏子陽』の例をみると、『夏子陽』で新出する項目に以下がある。

表15 「ゆくし」義に対する音訳漢字

	夏子陽
説謊	由沽辣舍

この提示語“説謊”は「嘘を言う」を表し、音訳漢字は現代語の/'jukusi/に相当し、「うそ、いつわり」という意味を表すと考えられる。もしそうであれば、音訳漢字冒頭の“由”は「ゆ」を表しているものと考えられる。

また、『伝信録』と『見聞録』の用例では、より「ゆ」の発音に近い撮口呼の発音が選ばれているので、のちの資料では「ゆ」の音を表している可能性はより高いものと思われる。しかしいずれにしても、この用例だけでは不十分であるため、音訳漢字の“由”と発音が異なる以下の“露”の例と併せて考えてみたい。

### 3. 2. 4. 露(つゆ・つよ)

『おもろさうし』には第1巻39(39)と第13巻88(833)に「つゆ」に相当する語が出現し、第1巻は「つよ」と「広母音化」した形式で記されている。

#### 【つよ】

「又 あけの つよ おさちへ」第1巻39(39)

「しもの つよ おさちへ」第1巻39(39)

#### 【つゆ】

「又 あさ つゆは けりあけて」 第13巻88(833)

ではこの「つゆ」に対する漢語資料をみてみよう。

表16 「つゆ」に対する音訳漢字

	陳侃、夏子陽、伝信録	見聞録
露(つゆ)	禿有	七欲

提示語“露”の「つゆ」に対する「ゆ」には“有”の音訳漢字が用いられる。“有”を音訳漢字に使う例は他にはないため、やはり“有”は「ゆ」に対して用いられていることが分かる。実はこの“有”と前節の“由”は声調こそ異なるものの、中古音の音韻位置では同じ尤韻に属し、『おもろさうし』の時代に相当する清代官話<sup>(16)</sup>ではいずれも同音であったと考えられる。

有 ieu：云母、尤韻、上聲

由 ieu：以母、尤韻、平聲

『伝信録』の音訳漢字は蘇州語をもとに記されていると考えられるので<sup>(17)</sup>、“禿”は [tʰəu] を表すと思われる。よって時代的な違いと音訳漢字の基礎音系、さらに『伝信録』の用例をもって「露」が「つよ」のように「広母音化」していたとみなすことは困難だと思われる。

### 3. 2. 5. 夜(よる・よろ)

『おもろさうし』の「夜」は第7巻で「よる」、第8巻で「よろ」と記されている。

【よる】

「よる<sup>(18)</sup> なんか あすて」 第7巻23(367)

【よろ】

「よろは つき てる」 第8巻67(459)

では、『語音翻訳』における「夜」に相当する語の表記をみてみよう。

表17 「夜」義に対するハングル注記

	語音翻訳	発音
黑夜(よる)	이우루	[iuru]

以上のように、「夜」に相当する母音にはウ段に相当する [u] が当てられており、オ段に相当するハングルは使われていない。また、3. 2. 3. 冬(ふゆ・ふよ)の表10で観たように、弓や雪などウ段音の「ゆ」と同じ発音になっている。

漢語資料をみると、“夜”に対する音訳漢字が以下のようにあてられている。

表18 「夜」に対する音訳漢字

	陳侃、夏子陽	伝信録	見聞録
夜(よる)	由禄	哨羅	攸陸

音訳漢字“由”については、前述の「冬」と「露」で考察した通り、これらの例は当時の琉球語の発音で狭母音化していたことを示すのみで、当時において琉球語の上記の単語が「広母音化」していたとは言えない。

### 3. 2. 6. 祝(ゆわい・よわい)

ここでは「祝」の意味を表す『おもろさうし』の用例をみる。第5巻42(253)では「ゆわい事」と書かれ、その直後の第5巻43(254)では「広母音化」した「よわいこと」と記される。そして第16巻20(1146)にも広母音化した「よわい事」と記されている。

#### 【ゆわい】

「としのはちまりに ゆわい事 すれは」第5巻42(253)

#### 【よわい】

「としのはちまりに よわいことみ おやせは」第5巻43(254)

「あよそろてよわい事 みおやせ」第16巻20(1146)

では漢語資料ではどのようなになっているか見てみよう。『おもろさうし』の「祝事」に相当する提示語は“慶賀”で、接頭語「み」(音訳漢字は“密”)が付く形で注音されている。

表19 「祝」義に対する音訳漢字

	陳侃	琉訳	夏子陽	伝信録
慶賀(いわい)	密由歪利	密由外立	密由烏牙	密由烏牙

「ゆわい事」や「よわい事」の「ゆ」や「よ」に相当する音訳漢字には“由”が使用されている。これも“露”や“夜”で考証したとおり、「ゆ」を示しており、「広母音化」した「よ」を示しているものとは思われない。

### 3. 2. 7. 内(ウチ・オチ)

『おもろさうし』においては「内」を示す語が「うち」と「おち」の二つの形式で書かれて

いる。

【うち】

「たゝみきよは あよかうちはなけくな」第1巻36(36)

【おち】

「おきもうちの うまれて あよかおちのすくれて」第3巻13(100)

『語音翻訳』では、“裏頭”(「中」の意)に対してウジ/utci/と記述しており、「広母音化」を示してはいない。そしてやや時代が下るが『伝信録』に以下の用例がある。

表20 「うち」義に対する音訳漢字

	伝信録
中(うち)	屋之

音訳漢字の“屋”は、以下のようにオ段音に由来する語とウ段音に由来する語の両方に用いられている。

【う】

賣(うって)：屋的

唱歌(うた)：屋韃

弟(うっとう)：屋多

【お】

琉球(おきなわ)：屋其惹

興(おき)：屋起堅<sup>(19)</sup>

『中山伝信録』は呉語を基礎としているので、“屋”の音声はどうなっているのだろうか。現代呉語に照らすと“屋”は/oʔ/となっており、一見するとオ段の近似音に思われるが、蘇州語は/o/と/u/、/oʔ/と/uʔ/の対立がないため、“屋”がどの音を示しているかは判然としない。そもそも、呉語で当時に合流していたかも知れない琉球語のオ段音とウ段音を弁別することがもともと困難であった可能性がある。

#### 4. おわりに

本稿は『おもろさうし』のみに焦点を当てた従来の分析に対し、朝鮮語資料や漢語資料を中

心とした他の資料を含めたよりマクロな視点で『おもろさうし』の u>o、i>e といった「広母音化」の現象を分析した。現存資料の制約から、分析対象とした語彙が稀少で、本稿は『おもろさうし』における全ての「広母音化」をカバーしたものではない。しかし、外国資料から『おもろさうし』を観ると、『おもろさうし』のみが顕著な「広母音化」が観られる資料であるという結論にいたる。そして、時代が相前後する朝鮮語資料、漢語資料、英語資料などに範囲を拡げても、『おもろさうし』ほど「広母音化」が顕著な資料はない<sup>(20)</sup>。琉球語史解明のための言語資料として『おもろさうし』を位置づけた時、『おもろさうし』は他の資料とは異なる特徴をもつ資料という評価となる。

文章表記においてある種の類推的な表記が行われること自体は、とりわけ琉球においてはきわめてありふれた現象である。沖縄の言語学者・金城朝永氏の一文に「大和ゴキの話」<sup>(21)</sup>がある。「ヤマトグチ」と言えば正しいのに、「グ」を「ゴ」に、「チ」を「キ」に標準語風に発音してしまった結果、誰も口にしていない「ヤマトゴキ」という発音になってしまったエピソードが記されている。ちなみに「グ」を「ゴ」に発音するのは「広母音化」である。これは典型的なハイパー・コレクションであるが、話し言葉のみならず、琉歌の表記においてもこうした例はかなり多く観られる<sup>(22)</sup>。『おもろさうし』の編纂された時代より教育も普及し、文書の書き手も増えていたと思しきののちの時代においても、こうした現象は発生するのである。このことを考慮するなら、『おもろさうし』ひとりがこうしたバイアスから自由であったとは考えづらい。

もちろん『おもろさうし』のもととなった歌謡が口唱されたものであったことは疑いを容れない。だが口承されたものが文字に書き起こされる段階で全ての音声がありのままに書き写されるとは限らないばかりか、むしろそれは稀であといえよう。口頭でなされた表現が文字に記す段階で類推的仮名遣いの意識が働くことの方がむしろ一般的である<sup>(23)</sup>。『おもろさうし』も文字は仮名を用い、『混効験集』も和文で書かれる。これらの書き手は当然、和文を書くことができたと考えられるが、彼らが文字を覚え、文章を認めるようになるには長きにわたる訓練が必要であったはずである。その訓練のプロセスである種の規範意識が内面化されるのが通例である。よって、少なくとも口承したものをそのまま書き写したものであるという前提で『おもろさうし』の言語を分析することに対しては、十分な慎重さが必要とされるものと思われる。

〔注〕

- (1) 本稿は石崎博志(2018: 82)で概略的に書いた内容を、より詳細な用例をもって実証的に記述したものである。
- (2) 間宮厚司(1998)、佐藤清(1996)など。間宮厚司(1998)は「3『おもろさうし』の表記に関する見通し」において「ここで、『おもろさうし』全体の表記のあり方について筆者の見通しを言うならば、『おもろさうし』は詠唱されていた実際の音を、表記者が聞いたとおりに文字化したものである、ということになる。」と述べ、「おわりに」において「今回の考察で、従来の規範意識による類推表記という見方、つまりウ段の音をオ段の音に戻そうとする意識の過剰がクニ(国)

と発音されていた語を「こに」と書き直させたとする考えを完全に否定することはできないのかも知れない」とも述べている。

- (3) 外間守善(1971)はそのまま写し取ったものを「表音的仮名遣い」、類推的仮名遣いを「国語的仮名遣い」としている。「表音的仮名遣いは、帯を「うび」、雲を「くむ」と書く書き方にも表れ、国語的仮名遣いの「おび」「くも」表記と対立している。このような国語的仮名遣いと表音的仮名遣いの摩擦の中で、国語的仮名遣いを表記法の規範にしようとする規範意識が強く働いて、婿を「もこ」、「国」を「こに」とするようないき過ぎた類推表記(三番めの混乱因)が生まれたのである。」とする。
- (4) 中本正智(1990)、石崎博志(2015)参照。
- (5) 有坂秀世(1934)、伊波普猷(1934)などを参照。なお現代首里方言においては、ウ段音がオ段音に、イ段音がエ段音に変化する例(広母音化)は殆ど存在しない。
- (6) 『おもろさうし』には、本稿で採り上げていないものも多くあり、以下の語がある。
  - おきしま←うきしま(浮島)
  - おまれて←うまれて(生まれて)
  - おるわし←うるわし(麗し)
  - おゑて←うゑて(植えて)
  - こだか←くだか(久高)
  - おやかに←おやくに(親国)
  - よのし←よのぬし(世の主)
  - もすめ←むすめ(娘)
  - あよも←あよむ(歩む)
  - ようどれ←ゆうどれ(夕凧)
- (7) 黄润华(2003)所収版本を使用。
- (8) 『定本おもろさうし』は、『尚家本おもろさうし』を定本とし、田島本『おもろさうし』、からの舎本『おもろさうし』、仲吉本『おもろさうし』、伊波本『校訂おもろさうし』、『校本おもろさうし』と校合している。
- (9) “監”は“藍”の誤字。
- (10) この他にも以下の例があるが、跪(ひざまづき)：非撒慢都急、去：亦急の例があるが動詞の語尾が関係するため、これらの例は考察から除外する。
- (11) これは現代では「ウージ」であるが、元来は「オギ」に由来する語である。
- (12) ちなみに助詞の「わ」と「は」の書き方においては、第15巻18(1069)、第11巻88(643)の用例を考え合わせると、第12巻はより標準日本語の書き方に近いものになっている。
- (13) なお、「冬」の用例からは外れるが、「なつ、ふよむ、わからず」第15巻41(1092)、「ふよ、なつも、わからず」第15巻41(1092)は、助詞に「む」と「も」の表記がある。
- (14) 陳侃は“冬”は“由福”になっているが、“福由”の誤りである。よってこれを修正している。
- (15) 琉歌や組踊の題材に「雪」などの本土の景物が描かれることは決して珍しくはない。
- (16) Francisco VARO *Arte de la Lengua Mandarina*(1703)では声調は異なるものの、由と有はともに ieu と注音されている。Coblin/Levi(2000)参照。
- (17) 石崎博志(2015)参照。
- (18) 尚家本のみ「か」に作り、その他は「る」につくる。
- (19) 不詳。興は「おき～」を表しているものと思われる。
- (20) 石崎博志(2015)を参照。
- (21) 『月刊琉球』1巻1号(1937)年5月。「沖縄で、日本語のことをヤマトグチ(大和口)といっているが、グチでは日本語らしく響かぬと思ひ違ひして、ヤマトゴキと言ひなした人が明治中期のいわゆる普通語奨励時代にいたそうである。またずっと以前に国頭郡から県会議員に選出された屋部憲勇さんという人が、県会かどこかの演説の席上で島尻郡のことを島ギリ郡と真面目

な口調でやってのけたとの話を比嘉春潮さんから承った」

(2) 石崎博志(2018)参照。

(3) 現代では表記のみならず、話した内容とは全く異なる文語に姿を変えてしまうことも決して珍しくない。

#### 〔参考文献〕

- 有坂秀世(1934)「母音交替の法則について」『音声学協会会報』34；(1944)『国語音韻史の研究』東京：明生堂
- 石崎博志(2015)『琉球語史研究』東京：好文出版
- 石崎博志(2018)『走る日本語、歩くしまくとぅば』那覇：ボーダーインク
- 伊波普猷(1934)「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」『南島方言史放』；(1974)『伊波普猷全集第4巻』17-46.東京：平凡社
- 黄润华(2003)《国家图书馆藏琉球资料汇编》北京：北京图书馆出版社
- 金城朝永(1937)『月刊琉球』1巻1号1937年5月；(1974)『金城朝永全集』那覇：沖縄タイムス所収
- 佐藤清(1996)「『おもろさうし』の木と毛の表記について」『琉球の方言』20：152-201.
- 高橋俊三(1977)「『おもろさうし』に於けるエ段音とイ段音」『沖縄国際大学文学部紀要・国文学篇』6(1)：19-34.；(1991)『おもろさうしの国語学的研究』東京：武蔵野書院
- 仲原善忠・外間守善(1967)『おもろさうし辞典総索引』東京：角川書店
- 外間守善(1971)「『おもろさうし』の仮名遣いと表記法」『沖縄の言語史』東京：法政大学出版局.
- 中本正智(1990)『日本列島言語史の研究』東京：大修館書店.
- 外間守善・波照間永吉(2002)『定本 おもろさうし』東京：角川書店
- 間宮厚司(1998)「『おもろさうし』における類推表記<u→o>の再検討」『沖縄文化研究』24：189-210(のち間宮厚司(2005)『おもろさうしの言語』東京：笠間書院所収)
- 柳田征司(1998)「『おもろさうし』に見える、本土方言イ段音に対応するエ段音-沖縄方言の史的位  
置に関する有坂・服部説を検討するために-」『ことばから人間を』東京：昭和堂. 94-106.
- 柳田征司(1999)「沖縄方言の史的位  
置(上)「キ」(木)「ウキ」(起き)「ウリ」(降り)などの問題」『国語国文』68(4)：16-34, 1999-04.；柳田 征司(1999)「沖縄方言の史的位  
置(下)「キ」(木)「ウキ」(起き)「ウリ」(降り)などの問題」『国語国文』68(5), 38-55.
- Coblin/Levi(2000) *Francisco Varo's Grammar of the Mandarin Language, 1703: An English Translation of 'Arte de la Lengua Mandarin'*, John Benjamins Publishing Company

(いしざき ひろし 中国学科)

2019年10月30日受理